

福岡良明著『「反戦」のメディア史 戦後日本における世論と輿論の拮抗』、吉村和真・福岡良明編著『はだしのゲン』がいた風景 マンガ・戦争・記憶』

川口 隆行

栗原のいわば「身を切るような」個人的情念の社会化の過程、すなわち私的体験を社会的な共有物へと転じさせようとする過程を確認するのであれば、私たちは作品において被爆者が表象の対象となることの緊張感の問題を見過ごすことはできないであろう。栗原は、広島の被爆者のなかには「破壊型の被爆者」がいて、「ピカが、ドカンドカン世界中に落ちりやあええ。そしたら、ちったあ原爆の恐ろしさや被爆者の苦しみがわかるだろう」といった言葉が、体験記や詩作品のなかにはしばしば見受けられることを指摘している。こうした被爆者の言葉は、表象過程における権力関係のみならず、そのような表象を受容する者に対しても、緊張感を要求する。

（吉田幸治『はだしのゲン』を読み解く視点、『はだしのゲン』がいた風景』二九七頁）

この文章のポイントは「緊張感」といったあたりにあるのだろう。そしてこの「緊張感」が、「いま、ここ」において急速に失われようとしているのではなかるうか。戦争体験を聞いたり、読んだりするということは、「真理の言葉」を発せようとする体験者との対峙において、特には共感し時には反発しながら、相手との距離を手探りで確かめ推し量っていく、そんな行為なのだと思う。「真理の言葉」を発せようとする相手は、なかなか手ごわい。こちらの了解や理解に、絶対的な存在感をもって「否」を突きつけることだってある。むろん聞く側（読む側）にしたって、必ずしもひれ伏す必要はない。気に入らねばどしどし言い返せばよい。体験があるからといって、体験者が語る言葉が真実のすべてでは決していないのだから。いずれにせよ、こうした緊張に満ちた応酬こそが、硬直した人間関係、社会関係を刷新、更新する力となってきたのは間違いない。

原爆被爆者に限らず、アジア・太平洋戦争を体験した人たちは、遠からずこの世から姿を消す。体験者が *gone* な場で体験を語りえるのもあと一〇年ほどだろう。とはいえ、体験者がこの世から去ろうとも、その存在や出来事の痕跡は、多種多様なメディアを通して言葉やイメージとして残りつづけよう。私たちはやはりそうした痕跡の一つ一つから過去の出来事を読み解く想像力を鍛え、それを語る方法を探りつづけたほうが良かるう。蓄積されたアーカイブへの向かい方（倫理）は、これから益々重要な課題となるに違いない。むろんそうした営みは被爆直後から、体験者と非体験者、体験者内部において延々と繰り返されてきた。

だが、体験者の存在が決定的に失われようとするいまだからこ

そ、こうしたことは何度でも意識しなおしたほうが良い。体験者の消滅とは「否」を突きつけてくる存在が、表面的にはこの世から姿を消すことなのだ。それが歴史に向き合う緊張感の喪失へと墮するのであれば、そこかしこで歴史（記憶）の「横領」といった事態が横行するだろう。とりわけ「原爆」だの「沖繩」だの「空襲」だのといった、「伝えねばならない」ともっともらしく言われる出来事こそ、そうした危険性がつきまとう。“伝えねばならない”のなら、伝えましょう。だけど私の好き勝手な物語をねごと。いや、当人は善意かつ真摯に語っているつもりで、語ることが当該社会の正義だと頭から信じていることだってあろう。しばらくの間、「原爆」の記憶だって消滅するどころか、当事者を僭称する輩にとつて極めて都合の良い歴史（記憶）が、次々と語られていくだろう。まさに死人に口なし。いや死人の口を借りて魑魅魍魎が饒舌に喋り出す光景。むしろ「原爆」「文学」「研究」などを当面の看板に掲げる私にせよその外部に立っているわけではない。

※

福岡良明著 『「反戦」のメディア史 戦後日本における世論と輿論の拮抗』、吉村和真・福岡良明編著 『「はだしのゲン」がいた風景 マンガ・戦争・記憶』の帯には、それぞれ〈映画と書籍に映る「反戦」のナショナルリティ〉、〈ポピュラーカルチャーが紡ぐ《戦争の記憶》とある。

国民は「先の戦争」に何を読み込んできたのか。「原爆」の語りと「沖繩戦」の語りにはいかなる相違があり、またそれはどのように変化したのか。戦争観の位相差と変容、そして世論 popular sentiment と輿論 public opinion の葛藤を描いた、画期的な戦後メディア論（『「反戦」のメディア史』）

「はだしのゲン」は、いかに記憶されてきたのか？ メディア史・マンガ研究・社会学・教育学を横断する、画期的な文化研究！（『「はだしのゲン」がいた風景』）

前者はアジア・太平洋戦争を想起することで生み出された表現を「反戦」と括つてみせたうえで受容のプロセスを検討したものであり、後者は「原爆」の語りの中で特異な位置を占める「はだしのゲン」に焦点化し、学際的脱領域的考察を目論んだものである。なによりまず指摘しうるのは、両者とも膨大なアーカイブを集積、整理しようとした点であろう。例えば、『「反戦」のメディア史』で「原爆」を問題化した第四章において、『原爆文学研究』や『敍説』といった先行する文学研究の成果を十分組み込みながら、さらに徹底した資料集積がなされ、それが緻密な論理構成のもと配置されている。『「はだしのゲン」がいた風景』が、「はだしのゲン」と正面から向き合った最初の論集ということを思えば、データベースの確立という点からいっても、うそ偽りなく画期的な仕事であろう。ましてそれが様々な領域に跨つた若い知性の結集で果たされたことの意義は大きく、今後のあるべき研究の一つの指針を示していると考えよう（ここに文学研究プロ

パーが入っていないのは、ちと寂しい)。

むろんこの二冊が評価されるべきは、アーカイブの集積にとどまらない。アーカイブから導きだされる具体的な論拠にもとづいた指摘からは、多くのことを教えられた。一つ一つを挙げるときりがないので、『「反戦」のメディア史』に限って、特に蒙を啓かされた点を二つ指摘しておこう。まずは、占領期の「原爆」の語りと同時に他の戦争の語りとの異質性についての指摘である。軍部批判という政治メッセージを強く打ち出した『きけ、わだつみの声』『ヒルマの竖琴』に比して、『長崎の鐘』に代表される「原爆」の語りでは、「祈り」とか「ヒューマニズム」といった叙情的側面が前面に押し出されるという。原爆投下の直接の責任主体であるアメリカ合衆国との関係を考えれば当然とも言えるのだが、「原爆」という枠組みのなかで思考しやすいものにとつては死角とさえ言えよう。そして、アジア諸国への戦争責任、加害責任を問うことが、「沖繩への加害」「戦場体験の多様性」を見失わせることになったという、第三章での「ひめゆりの塔」の受容の問題を指摘するくだりは、圧倒的に唸らされた。昨今、沖繩は被害者であると同時に加害者であるといった言葉も聞かれる。だが、そうした言葉が一面の真理であるとしても、誰がどのような文脈においてそれを誰に語るのかによつて、まったく違った政治的社会的効果を生み出すことに、私たちは充分注意したほうが良い。

※

二冊の執筆者たちに共通するのは、自分たちにとつて「戦争体験」「原爆体験」とは、即ち膨大なメディア体験なのだという意識であり、それが自分たちにとつての真実の体験なのだという自覚であろう。吉村和真が書いた『「はだしのゲン」がいた風景』のプロローグにはそうしたことが明確に表明されている。(たしかに《私たち》は「現実の戦争」を知らない。だが、ある種の仕方において、戦争体験者の人々よりも戦後世代のほうが、「あの戦争」のことを、あるいは「あの日」のことを、むしろ知っているのではないか——そんな疑問が頭から離れなかったからである)(三頁)、《私たち》は、マンガやテレビ、映画、写真、アニメ、ゲームといった視覚表現、メディア、ポピュラーカルチャーを通じて、「あの戦争」のことを、「あの日」のことを知っている(四頁)、《戦後日本において、「戦争の実態を知る」とか「戦争について考える」といった経験が、実体験ではなく、そのような視覚表現、メディア、ポピュラーカルチャーを通じてなされてきたという現実と正面から向き合い、その可能性や課題を見つめ直すことの、現代的重要性を喚起しているのである(五頁)。

吉村がいささか挑発的に言わんとすることについて、基本的に私も同意する。体験者の消滅によつて、膨大なメディア、アーカイブからしかアジア・太平洋戦争の出来事を読み取れなくなろうとしている現在、自らの体験を作り上げてきた情報の錯綜した関係性に分け入ることは、将来においても「あの戦争」を語るうえで、極めて重要な意味をもつだろう。吉村の言う「現代的重要性」を《喚起》するというのは、そういうことなのだ。

さらには、アジア・太平洋戦争の記憶が、多様なメディア

の氾濫と政治的社会的要因のもとで、「横領」されようとしている事態に、何らかの抵抗点を探ろうとする志向を、緩やかにではあるが、共有しているように思われる。それはとりわけ福岡良明の議論にはつきりと伺うことができる。福岡は『「反戦」のメディア史』において、佐藤卓己の議論を借用した、「世論 (popular sentiment) (私的な感情にとどまる大衆的な感情・情念) と「輿論 (public opinion) (論理と事実に依拠した公的な意見・政治意識) という理論的枠組みを、愚直なまでに一貫して使用していく(福岡のいう「世論」とは、特定の個人の感情を指すものなのか、そうした個人の感情の集合体を指すものなのか。両者が微妙に混在して論が展開されている点がいかに気にはなるのだが)。彼が描こうとするのは、「世論」と「輿論」が二項対立して、静態的に対置されるような世界ではない。「世論」と「輿論」の複雑な横断の諸相である。そうした歴史記述を通して、「世論」に訴える力をもたない「政治的正しさ」とは違う、「世論」を煽ることで生み出される偏狭なナショナリズムとも異なる、開かれた「輿論」の契機を探ろうとする。おそらくそれは、小林よしのりの『ゴーマニズム宣言』、呉市の大和ミュージアム、映画『男たちの大和／＼YAMATO』といったメディア(そこにこうの史代『夕風の街 桜の国』を加えても良からう)が描き出すアジア・太平洋戦争の表現とそれに熱烈に共鳴を寄せる日本社会の多数の享受者の存在といった現状の課題について、それを他人事として裁断するのではなく、自分の内部にも単食う問題として受けとめたいうえで、解決の道筋を見出すとしていくからだろう。

『はだしのゲン』がいた風景』の執筆者が共有するのも、戦

後日本のある意味硬直化してしまっただとも言える「反戦・平和」という「輿論」に囲い込まれた「はだしのゲン」を、窮屈になった囲いから一旦解放してみせようという意気込みである。そこから出発することしか、「いま、ここ」におけるアクチュアルな問題への接点を見つけることはできないということだろう。

※

では、今後、私や私たちはこの二冊の成果をどのように拡張していけばよいのか。

例えば、福岡は「世論」の中から(反戦)ナショナリティを解する契機を見出そうとするのだが、ここで将来的に構想される「世論」とは、いかなる具体的な public な空間を創出するものなのか。「安易な」政治主義とそうでない「輿論」の差異とはどういう規準で判定できるのか。そもそも両者は凄然と区別できるものなのだろうか。

『「反戦」のメディア史』終章において、長崎の被爆者であり長年原水禁運動に携わっていた岩松繁俊の言葉が参照されている。(被害者としての立場をとことん追求してゆけば、ふたつの局面にぶつつからざるをえなくなる。ひとつは、他国の被害者との共通性の認識である。そしていまひとつは、いたましい被害者をうみだした加害者の存在への認識である。前者は戦争被害者としての共通認識による国際連帯の自覚であり、後者は被害者認識の極限における加害者認識への意識の転換である)。(もし被害者としての立場に徹しきることができるならば、その極限におい

て、加害者は誰であったか、の発想にいたらざるをえないはずである。加害者なき被害者はありえない」といったものだ。

福岡はこうした岩松の主張を「被害体験」の深化と「加害責任」の自覚の連続性」を示唆するものとして、「被害—加害」の不毛な二項対立をつき崩すばかりではなく、「反戦ナシヨナリテイ」の欲望をも批判的に照らし、それを乗り越える政治実践 public opinion を構想」するものとして高く評価する（p.三二八）。

それはすなわち、「世論」を徹底的に掘り下げていくことが「輿論」に転化するという逆説的なプロセスを指摘することで、ひとまず議論の枠組みとして持ち出した「世論」と「輿論」の葛藤という図式を、最終的に解体しようという目論見でもある。ここで「世論」と「輿論」の複雑な横断の諸相を描き出すという目的はひとまず成功したかに思われる。

だが、やはりもう少し立ち止まって考えねばならないことがあるように思う。そもそも岩松の言葉には論理的跳躍があるので。自分に加えられた痛みを徹底して見つめることが、他者に加えた痛みを理解することになるとは、論理的にも経験的にも残念ながらそうではない場合を私たちは多く知っている。自分に加えられた痛みを掘り進めた先にあるのは、やはり自分（たち）だけの痛み、そしてそうした痛みを加えた存在への猛々しい憎悪ということだ。九・一一事件の跡地をグラウンド・ゼロと命名しながら、広島、長崎の出来事を真に想起することもなく、責任や加害性といったことを微塵も意識することのない、そうした想像力を思い浮かべても良い。

岩松の言明にあるのは、いわゆる「そして」で繋がる論理では

ない。「にもかかわらず」で繋げようとする論理であることを看過すべきではない。被害者としての意識を追究する「そして」それが加害者としての覚醒に繋がる、といった論理ではない。被害者としての意識を追究する「にもかかわらず」それは加害者としての覚醒になりえるのだ、といった論理なのだ。岩松はいわば実存を賭けた無根拠な決断を敢行することで、「被害」と「加害」のパラドックス（「世論」と「輿論」のパラドックス）を超えよう、断ち切ろうとしたのだ。私は岩松のこうした「にもかかわらず」という跳躍を非難したのでない。どちらかといえば、逆なのだ。こうした跳躍に賭けることで、他者との連帯の希望を繋ごうとした岩松の姿勢に最大限の敬意を払いたい。（その極限において）とか（とことん追求していけば）という言葉には、岩松の倫理的決断、覚悟が込められている。

本文冒頭に述べたことでは、やはりそれは「緊張感」の問題とも言えよう。岩松の発したぎりぎりの言葉につりあうほどの「緊張感」を、受けとめる側は備えているのだろうか。いや、これは福岡への問いというより、私や私たちに向けられた問いである。仮に、岩松の挑発的言辞を、その「緊張感」を脱色して読めば、それは単なる自己憐憫へと翻訳、変換されるだろう。まして多様なメディアの氾濫のなかで増幅しながら語られるとすれば、開かれた「輿論」などは似ても似つかない、「世論」に名を借りた最悪の政治主義を招きかねない。

福岡が参照する岩松の発言は一九八二年に出版された『反核と戦争責任』に見られるものだが、実はその少しあと、大雑把に言えばほぼ同時期と言っても差し支えない一九八六年の段階で、岩

松は次のように発言もしている。(原爆被爆者は、まず加害者としての責任を考えて自批判をし、その上で反戦運動をやって、次に原爆被爆問題を取上げねばならない)、(被爆問題を取上げる場合、日本人より朝鮮人、中国人を一番先に被爆者援護法適用にするということ)を日本政府はやる責任がある(「罪の意識からの出発」一九八六年三月引用は『日本原爆論体系』第七卷二四九頁)。両者を別の水準の言葉とみなすのか、それともまったく逆のベクトルを向いた発言と理解するのか、ここで論じきことは難しい。ただ、端的に言って前者は「被害者意識の徹底」を説くのに対して、後者は「罪の意識からの出発」を説いている。「被害者意識の徹底」という心情と「罪の意識からの出発」という政治的言説が緊張感をともなつて分がちがたく結びつくことこそが、岩松にとって自己の心情(経験)と他者の心情(経験)を架橋しようとする原動力であつたのかもしれない。

さて、岩松の言葉で閉じられる『「反戦」のメディア史』を讀了して再度引き戻されるのが、序章における加藤典洋と高橋哲哉の間で交わされた戦争責任論であろう。特に(三百万の自国の死者への哀悼をつうじて二千万の死者への謝罪といたる道)を説く加藤と(被害者としての立場に徹しきることができぬならば、その極限において、加害者は誰であつたか、の発想にいたらざるをえない)と述べる岩松の立場は、極めて近接しているように見える。だが、加藤の言葉や姿勢に、岩松が込めたような「にもかかわらず」はあるのだろうか。少なくともいまの私にはそのようなものを見出すことは難しい(余談にすぎないが加藤にとって、例えば沖繩の死者とは「自国」の死者なのだろうか、「アジア」の死者な

のだろうか。朝鮮、台湾で志願、徴用され皇軍の一員として死んでいった人たちは、「自国」の死者なのだろうか、「アジア」の死者なのだろうか。加藤の議論にはそうした問いは用意されていない。他者からの応答責任をいう高橋哲哉も、この論争の時点においては、充分にこの点を展開しえていない)。九〇年代半ばのこの論争を経て、二一世紀を迎えた今日、日本社会の主流に流通、氾濫しているのは、岩松の言葉に込められた「にもかかわらず」を易々と読み過ぎた言葉ではなからうか(こうした事態はかならずしも日本に限定されるものではない)。

原爆投下を知つて、原爆が自分たちを救つた、と思わずにいられたなかつた中国や東南アジアの人々の「心情」。原爆投下によつて、植民地から解放されたのだと素朴に思う、韓国、台湾の人々の「心情」。それはたしかに一九四五年以降の各地域の政治主義(ナシヨナリズム)やアメリカ合衆国のアジア支配によつて積極的に利用され、構築されたものであるが、それもいまとなつては歴史の厚みから生み出された「心情」であろう。日本の被害者の「心情」とそうした他国、他地域の被害者の「心情」はどのような方法と姿勢において繋がりをえるのだろうか。戦後日本と全く異なる「世論」と「輿論」が葛藤する社会システム(のなかで生きる人々)との架橋は如何にして可能となるのであろうか。そのようなものを志向する際、福岡が提示してみせた「世論」と「輿論」の葛藤で戦後日本社会を描き出すという姿勢は、どこまで有効な方法なのだろうか。もしやまったく別の理論的装置(またはより洗練された理論的装置)と倫理的態度が要請される必要があるのではなからうか。

そもそも体験者がこの世から姿を消そうとしている現在、果たして日本の社会の「世論」（といっても多種多様であろうが）固有の「心情」「情念」を徹底していくというだけで開かれた「輿論」は可能になるといつてしまつてよいのか。（語りがたき心情の語りがたきに踏みとどまりながら、いかにそれを開かれた輿論へとつないでいく）（三三一頁）役割が、非体験者の手にゆだねられようとしている現在、そこに大きな異が待ち受けていないのだろうか。

※

インターネットは、かつてありえなかつた人と人、知と知の接続を可能にしたという。だが同時に自己にとつての快適な情報だけを相手にすることが済む、自閉されたメディア環境をもたらした。趣味や関心の共同体の無限定な拡大は貧困な想像力を益々助長して、他者との分断をつくりあげていく。マスメディアないし文化産業の強力な支配は、それを加速度的に推し進め、自由な共同体、開かれた「輿論」を不可能にしている。そしてそこに加えて体験者の消滅という不可避の事態が、過去の出来事、他者の記憶に向き合う緊張感を一層失わせている。

こうした私なりの大雑把な現状診断を前提に、『はだしのゲン』がいた風景』について二つばかり指摘しておきたい。一つは、この論集において「はだしのゲン」の「絵」の分析があまりなされていないということである。「はだしのゲン」はしばしトラウママンガの代表のように言われるのだが、それは被爆体験というス

トリー以上に、そのストーリーの重みを保証してきた「絵」の効果であろう。この「絵」の問題を議論の遡上に載せない限り、究極「はだしのゲン」を論じたことにはならないのではなからうか。例えば、同じ中沢啓治の作品でも『黒い雨にうたれて』収録の作品の多くは、一九六〇年代後半に流行した劇画風の絵柄である。一九七三年に連載開始された「はだしのゲン」とは明らかに違う。素朴に言つてもこの「絵」の変容はなぜなのかといった疑問が私には存在する。大人向けの雑誌か少年誌かといった連載誌の違いも確かにあるのだろうが、たとえば、この問題を七〇年代前半の「リアリティ」を巡る議論に接続することも可能だろう。メディアの多様化と情報の氾濫は、ヨネヤマ・リサによれば「シユミラクルの洪水」といった事態を招いたとされるのだが、そもそも「シユミラクルの洪水」における「原爆」のリアリティを巡る議論が「はだしのゲン」が登場する時期に存在していた。広島原爆資料館の生々しい火傷やケロイドを表現化した蠟人形の設置をめぐつて、「リアル化論争」が展開されたのが一九七二年である。インターネットでの「はだしのゲン」をめぐる発言を読むと、

二大トラウマとして、「はだしのゲン」と資料館のジオラマがたびたび挙げられており、それはおそらく偶然ではない。マンガというメディアと空間的な記憶メディアである両者は何をどのように提示すること（表象すること）が、この時期において「リアル」と見なされるのかといった問題設定を共有していたのではなからうか。おそらくこれは、文学をはじめとするほかのメディアの問題や体験者の語りの変容といったことも対応しているように。

いずれにせよ、「はだしのゲン」というマンガのインパクトを

保証してきたのが、「原爆」という物語性だけでなく、ましてや「反戦平和」という政治的メッセージだけではなかったとしたら、その「絵」に込められた欲望の次元を徹底的に検証しなおす必要がある。もちろん、この論集の中で、そうした問題に切り込もうとした論者がないわけではない。第八章『「はだしのゲン」のインパクト』（吉村和真）は「絵」に込められた、そして享受者が読み込もうとした欲望のありようを検討する手がかりとなるだろう。学校での「はだしのゲン」の享受を論じた、第五章の『「はだしのゲン」の民族誌』（伊藤進）で指摘される「ストーリーを楽しまない」読書経験というのも、「絵」の問題と深く関わってくるだろう。

この論集の基本姿勢は、執筆者各人が経験した「はだしのゲン」享受を、方法的に洗練された形で意識的に辿りなおすということとにある。二点目に指摘したいのは、そこから先の問題として「いま、ここ」の「はだしのゲン」の享受のあり方にまで議論を展開することは十分可能だということだ。具体的に言うならば、現在誰よりも「はだしのゲン」で真摯に遊んでいるのが、インターネットにおける「1995 Gen Production」

<http://www.kamatokyo.com/home.html> である。まず一読して、私などが素朴におもったのは、「はだしのゲン」の享受をメインに据えたこの論集において、なぜこのページへの言及がないのかということであった。ページの管理人である「みちさん」が、「1995 Gen Production」をフリーペーパーとして始めたのは、文字通り一九九五年のこと。その後、二〇〇〇年頃にネット界に進出したという。「1995 Gen Production」を見れば一目瞭然

であるが、そこはどこまでおふぎけなのか真面目なのか判断としない空間である。アスキーアートで「はだしのゲン」を再現する「はだしのゲソ」のページ、「萌えコマ」を投票する「最萌えコマ大賞」のページ、エロサイトか便所の落書きかと思まがわんばかりのやりたい放題の「絵」の描き換え。不謹慎極まりない試みの連発と思えなくもないのだが、作者中沢啓治はこれを公認しているという。

坪井秀人によれば、一九九五年あたりを境に第二次世界大戦の記憶の変質、変容が起きたという（『戦争の記憶をさかのぼる』（ちくま新書、二〇〇六年八月）。そこから考えると「1995 Gen Production」についても現今のインターネットと戦争の記憶の変容、世代論とナシヨナリズムといった問題系が浮上しそうだが、「反戦・平和」のメッセージで雁字搦めになっているこのマンガを、いったん自由にしてみようという志向において、「みちさん」と『「はだしのゲン」がいた風景』の執筆者たちは、明らかに問題意識を共有している。「1995 Gen Production」の試みは、「いま、ここ」においてどのような事態を切り開いているのか／いないのか。充分検討に値する事柄であるように思う。

何でもありのインターネット空間において、ほとんど例外的におもちゃ化されていないのが、先の吉村和真の論文で問題化された「黒い目の被爆者」である。管理人の「みちさん」が告白するところによれば、それは極めて意識的な行為なのだという。「黒い目の被爆者」こそが、「はだしのゲン」を「反戦・平和」のプロパガンダとして読むことを強いてきた「絵」であるので、あえてそれを外すということなかもしれない。だがそれは裏を返せ

ば、「黒い目の被爆者」だけは、「はだしのゲン」の「絵」のなかで、唯一おもちゃ化されずに残されているとも言える。とことんまでアナキーに徹しているように見えるこのページのうちに、奇妙なまでに屈折したある種の倫理的な態度を伺うことができるようにも思う。翻つていうならば、『はだしのゲン』がいた風景』の野心的な試みが、「1995 Gen Production」にどこまで拮抗しえる力をもちえているのか、そのような観点からこの本を読み直すことも、現在において充分意味あることではなからうか。

福間良明著 『「反戦」のメディア史 戦後日本における世論と輿論の拮抗』（世界思想社、二〇〇六年五月、三八六頁、一三〇〇円＋税）

吉村和真・福間良明編著 『はだしのゲン』がいた風景 マンガ・戦争・記憶』

（粹出版社、二〇〇六年七月、三〇三頁、資料二五頁、二四〇〇円＋税）